

## 自分で決める力

浜松市立蛸塚中学校 二年 相曾 千鶴

物心がついた頃から、私の家には仏だんがあった。特に仏教について理解していたわけではないが、出かける時にはいつてきます、運動会の前には、良い結果が出るようお願いをし、試験の後にはテスト用紙を供えて報告をする。そんなふうな生活の中には、見えない存在に対していつも手を合わせてお参りするという習慣があった。

この仏だんには、私の祖父母が入っているが、祖父は一才になる私のことを死の直前まで気づかい、かわいがってくれていたそうだ。だから小さな頃から、じいじが側で見守ってくれていると言われて育った。私にとって見えない存在は、当たり前のように近くにあったのだ。「西の魔女が死んだ」に登場してくる主人公のまいは、お父さんから死後の話を聞き、何年もの間ずっと考え続け恐れてきた。死んだら自分がなくなくなり、全てがなくなる。死んだら最後、みんなの記憶からも消えてなくなる。学校で友達とうまくいかなかったまいは、もしかしたら死と向きあった時間があったのではないだろうか。たった一人孤独を感じて、つらい思いもしただろう。

でも、まいにはおばあちゃんがいた。多くのことを語らなくても、まいが傷つきつらい気持ちでいることを、ちゃんと理解してくれている人がいた。私はそんなまいがとてもうらやましい。まいは、おばあちゃんから魂の話を聞かせてもらい、見えない存在に気づいたことで救われたのかもしれない。私には祖父母がいないので、何か相談したいことがある時はたいい両親にしている。でも、なんとなく両親に話したくない時だってある。まいはおばあちゃんと魔女修業の話をし

ている時に、

「まいはずっとここにいてもいいですよ。まいがそうしたかったら、ママに頼んであげます。」と言われて、心からほっとした時があった。

私の一番好きな場面だ。嵐の荒野をずっと一人で歩いてきた旅人が、やっと小屋を見つけ、中に入ると暖かい暖炉に湯気をたてているごちそうがあり、そして何より愛情あふれる笑顔があつて、もう外に出なくていいんですよと言われたようなのだと表現されている場面だ。この時の安心感をまいは、身体じゅうの力が抜けた気がしたと言っているが、すごくすごくよく分かる。私は、ここまで現実から逃げ出したいと思つた経験はないが、毎日の生活の中には小さな悩みや迷いがくり返し訪れる。どうしたらよいのか、何を選べばいいのか、心の中がぐるぐる回り、最後は現実から逃げるように寝てしまう。寝て起きても解決していかないのだから、まいのように身体じゅうの力が抜けるような安心感に包まれることはできない。私の生活にはないものが、この本の中にはあった。だからこそ、この本を読んだ時には、ぐっと心に響く感じがあった。

もう一つ。私の生活と遠いもの。それは、まいとおばあちゃんが一緒に暮らした環境だ。竹やぶに木のトンネル。雑草やハーブでいっぱいの庭。裏の畑で採った野菜でサンドイッチを作って、その場で食べるなんていう経験も、私には今まで一度もない。木の切り株に腰を下ろして、ただぼんやり時を過ごす。まいはこの環境に囲まれて守られ、そして新緑の輝く若い木々の力強さに元気をもらっているように思われた。私も学校からの帰り道、いつもの景色が見えればほっとするし、自宅に帰って家族の笑顔に迎えられるれば、元気もでる。でもまいのように、自然の中で心からほっとしたり、元気をもらったりすることは難しい。時間を気にして時計とにらめっこをしない生活は本当に

うらやましい。

しかし、まいが自分の力で立ち直り、これからの人生にわくわくと希望を持てたのは、おばあちゃんや自然の優しさのおかげだけではない。おばあちゃんは、いつもまいにこう言っていた。

「いちばん大切なのは、意志の力。自分で決める力。自分で決めたことをやり遂げる力です。」

私も最近、すごく決断を迷った出来事があった。迷ったあげく両親に相談したが、その返事は何か納得のえられるものではなかった。考えてみると、私の気持ちは、すでに決まっただけでそれを認めてくれる言葉が欲しかっただけなのかもしれない。

自分が決めて実行したことは、それがたとえ失敗に終わったとしても、後悔はないと言いきかせて全力で取り組んだ。今は、自分で決めて実行したことを、心から良かったと思っている。

まいのおばあちゃんは、魂はいつでも成長したがっていると言っているが、本当に全力で取り組んだことは、私の力の源になっていると感じた。

書名	西の魔女が死んだ
著者名	梨木 香歩
発行所	新潮社